静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）第60号（2010.3）一〜十八

柳田国男と雑誌『民間伝承』の戦略

―昭和初期・民俗語彙と運動論―

Yanagita Kunio and the Strategy of "Minkandenshou"

矢野敬一
（YANO Keiichi）

（平成二十一年十月六日受理）

はじめに―鹿野政直『近代日本の民間学』から

近代日本にあってアカデミズムにポジションを得ていない民間学は、どのように展開していったのか。鹿野政直は『近代日本の民間学』で、民間学は一種の研究共同体を形作りながら進展した、その意味でそれは第一義的には「運動」として存在したという〔鹿野　一九八三　二〇七〕。研究発表の場そして同志結集の場として機関誌を創刊するのも、運動の一環だ。柳田国男でいえば大正二（一九一三）年から六年にかけて刊行した雑誌『郷土研究』がその一例だと、鹿野はいう〔鹿野　一九八三　五二〕。

佐藤健二によれば柳田の雑誌観は、はがきや郵便で自由に参集できる紙の上の「広場」だという。たとえば先の『郷土研究』には「紙上問答」欄が設けられ、読者の投稿による問いかけと答えのコミュニケーション欄が設けられていた。雑誌が担う運動としての側面をうかがわせる、特徴ある欄だと佐藤はいう〔佐藤　二〇〇一　一三〇・二八四〕。同じく大月隆寛も、「問いかけ」と「応答」の両者からなる交通が雑誌というメディアを通して成立し、それが初期の柳田の方法を支えていたと指摘する〔大月　一九九七　五二〕。

こうした出版活動を理解する上で参考となるのが、ジェームズ・ケアリーによる「儀礼的コミュニケーション観」だ。その論を紹介する長谷川一によれば、ケアリーのコミュニケーション観は「共有する」「参加する」「連合する」「協力する」「共通の信念を持つ」といった表現と結びついたものである。言葉を換えれば、メディアとはコミュニケーションを介してコミュニティを組織し、それを維持・展開させていく働きの中心にあるということだ。たとえば出版とは、書物を契機としてコミュニケーションを媒介し、それによってコミュニティを生成・確認・維持・展開していく一連の営みとして理解できよう〔長谷川　二〇〇三　三一・三六〕。その見解を敷衍すれば、柳田は人々を結びつける雑誌の機能に対してきわめて意識的であり、そのうえで自らの運動を展開していったことになる。出版活動それ自体にコミュニティを組織していく働きが埋め込まれているにせよ、それにどこまで自覚的であるかという点で、柳田は同時代の中にあって突出した存在だった。

とはいえ雑誌というメディアを駆使した柳田の運動論は、時代が進むにつれてその手法、目的に変化が生じていたことも見落としてはなるまい。先の『郷土研究』、さらにその後大正一四（一九二五）年に創刊した雑誌『民族』を通じて柳田が目指していたのは、資料の成果を雑誌を通して交換、交流することにあった。しかしその後昭和一〇（一九三五）年の民間伝承の会設立以後に柳田が展開した運動は、その性質が異なったと小国喜弘はいう。従来の研究成果の交流のみならず、特定の主題のもとで全国の会員による共同採集を企画したり、さらに民俗学の啓蒙普及・会員の新規勧誘をも活動のうちに含むものへと、その運動が広がりを見せたのだ〔小国　二〇〇一　二二〕。それまでの柳田はたとえば長野県を舞台として、文献資料の活字化を通じた知のデータベース構築の営みによって、読者のネットワークを編成する試みを続けていた〔矢野　二〇〇九〕。しかしそうした試みは後景に退き、新たに前面に出てきたのが全国的なネットワークを民間伝承の会を通じて立ち上げていくことだった。会の機関誌『民間伝承』を通じて「アカデミズムの世界と縁の遠かった、在野の人びとの学問的な好奇心をよび起し、彼らを一人前の採集者に育て上げた点で、柳田はたぐい稀なオーガナイザーであった」〔伊藤　一九八七　一一六〕という評価は、柳田の取り組みが飛躍的に実をあげたことを物語る。

ここでは柳田がどのようにして『民間伝承』誌上を通じて読者の積極的な参加を促しネットワークを編成していったのか、そしてそれを可能とさせた条件とはどのようなものだったのかを問う。そうした作業を通じて、当時の民間学がはらんでいた運動論の射程を推し量ることができよう。

一　民俗語彙―読者への呼びかけと応答の回路

全国各地から読者が資料を寄せる「広場」として、『民間伝承』誌は創刊当初から機能していく。各地の資料を雑誌の誌面上に持ち寄り交流するという手法自体は、多くの論者が指摘するようにすでに大正時代の『郷土研究』から柳田がとっていたものだ。そしてその手法は、民俗学関係の雑誌に多かれ少なかれ影響を与えてきた。

たとえば『民俗学』がその一例だ。柳田が編集に携わった雑誌『民族』が昭和四（一九二九）年に休刊後、新たに設立された「民俗学会」の機関誌として同じ年に『民俗学』が創刊。学会の設立には旧『民族』の主要メンバーが関わっていたものの、柳田は全く関与しなかった。にもかかわらず『民俗学』の誌面を見ると、手短な問題提起のための「寄合噺」といった欄、「誌上問答」欄といったように、紙の上の「広場」として雑誌が機能するよう、工夫が凝らされているのである。さらに各地から寄せられた情報を掲げる「資料・報告」欄に全体の半分近くのページ数が割かれているのも同誌の特徴だ。柳田の雑誌編集の手法がここではそのまま踏襲されているのである。また、より啓蒙的な性格を帯びた雑誌『旅と伝説』では、「婚姻習俗特集号」「誕生と葬礼特集」「盆行事特集」などと銘打ち、全国各地から報告を募って大部な資料集を雑誌形式で送り出してきた。

そうした流れの中で、民間伝承の会の設立と機関誌『民間伝承』の創刊は柳田国男がこれまで培ってきたノウハウの集大成としての意味合いを持っていた。自らの学を推し進めていくための運動論という観点からいっても、先に小国の指摘を引用したように新たな広がりを目指すものとなった。『民間伝承』の誌面構成でいえば、より運動論的な自覚に根

差した「読者への呼びかけと応答の回路」がそこに埋め込まれていたことが大きな特徴となる。その点で『民間伝承』の性格は、『民俗学』や『旅と伝説』と異なったものとなっていく。プロレタリア文化運動に従事した後、木曜会同人として『民間伝承』の編集に携わった橋浦泰雄らの果たした役割の大きさも、その背景として見逃せない。

『民間伝承』の発行母体である民間伝承の会の発足の経緯を、柳田国男研究会編『柳田国男伝』から紹介したい。昭和一〇（一九三五）年七月三一日、柳田の六一歳の誕生日にあたるこの日から七日間にわたって「日本民俗学講習会」（以下、講習会と略記）が、全国各地の民俗学徒を一堂に集めて東京・日本青年館で開かれた。この企画は柳田の還暦祝賀を自身が固辞して、より学問に寄与する企画を望んだことから始まったものである。講習会に先立つ昭和八（一九三三）年から柳田は自宅で「民間伝承論」の講義を始め、翌年にはその集いは「木曜会」へと発展していく。この年は日本全国各地の山村を対象とした三カ年計画の、いわゆる「山村調査」が着手された年でもあった。同九年には先の講義をもとにした概論書『民間伝承論』が刊行。そうした流れの中で、講習会が開催の運びとなったのである。

講習会での聴講生の数は当初の七〇人という予定を大幅に超え、百五〇名を超える盛況となる。講習会四日目の八月三日、午後の座談会終了後に柳田は祝賀会の記念として主に地方からの出席者を成城の自宅に招き、園遊会を開く。そこで「民間伝承の会」の設立と雑誌刊行が決められたのだった。講習会が終わって一カ月もたたない昭和一〇（一九三五）年の九月三日には、さっそく柳田邸で「民間伝承の会」の初会合の運びとなった。それからほどない同じ月の一八日、会の機関誌『民間伝承』が木曜会同人の守随一を編集・発行人として創刊。第一号の判型はＢ５判で八ページ。以後、次第にページ数は増していくものの判型は同じで、昭和一七（一九四二）年の第七巻第六号から体裁がＡ５判の一般的な雑誌のスタイルに改められた〔戸塚　一九八八　八〇六～八一九〕。

以後、民間伝承の会をベースとして、運動としての民間伝承の学は大きく展開していく。その中でも戦況の悪化によって調査自体が困難になる前、おおよそ『民間伝承』が創刊されてから五年ほどの期間を主な対象として、同誌がどのように読者を組織して柳田の運動論の要としての役割を果たしていったのか、という問題を論じていこう。

Ｂ５判の判型をとっていた時期の『民間伝承』の誌面構成は、ページ数の増減はあれど、基本的に一貫したものだった。最初のページに柳田や木曜会同人による原稿がほぼページすべてを使って掲載される。その他に各地からの報告を呼び掛け、具体的に何を調べるべきかを示す「採集要項」欄があり、それとある程度対応する役割を果たす「会員通信」欄も設けられた。さらに「紹介と批評」欄が単行本や雑誌で関連するものを取り上げ、「学会消息」欄が木曜会をはじめとする民俗学とその周辺の動向を扱う。柳田は創刊号巻頭「小さい問題の登録」（第一巻第一号、以下１‐１のように略記）で、「どこ迄も連絡の任務のために働くことにしたい」と会誌の性格を述べ、「日本民俗学上の諸問題の登録を、この小さな月刊物の一つの事業にしたい」と呼びかける。それと呼応するかのように、同じページの末尾には「寄稿歓迎」と題して、読者への呼びかけが続く。実際、当初八ページだての誌面のうち、二ページから二ページ半が「会員通信欄」に充てられた。数多くの読者がより集い情報交換が可能となる、佐藤健二が言うような「広場」としての役割を担うべく『民間伝承』誌面は意識的に構成されていたのである。

柳田国男が民間伝承の研究を推し進めるにあたって重視していたのが、三

民俗語彙である。昭和一〇（一九三五）年の民間伝承の会の立ち上げとほぼ同時に『産育習俗語彙』を上梓するや、『分類農村語彙』（一二年）、『分類漁村語彙』（一三年）、『歳時習俗語彙』（一四年）と続き、戦前では昭和一八年の『族制語彙』に至るまで刊行が続く。一連の民俗語彙集を一〇年に満たない期間にもかかわらず、一一種類も出版したのだった。柳田にとって民俗語彙とは「現代社会からはすでに忘れさられようとしていて、それを知ることによって日本人の生活やものの考え方などを知ることのできるようなことば」〔高藤　一九八三　八五〕だと、高藤武馬は位置付けている。そうした民俗語彙を重視する手法によって、「民衆の平凡なる過去生活を、内側から描き出す視点と方法とを獲得した」という永池健二の指摘は、柳田の学問的視点の特徴を端的に示すものだ〔永池　一九八八　七八四〕[1]。

だが柳田が民俗語彙に重きを置いていたのは、その学問的視点からの必然性だけにとどまらない。民間伝承の会の会員に具体的な問題を示し、それに対して会員それぞれが自らの地方の語彙を『民間伝承』の場を通して報告する、という運動論からの要請もあったことを見落としてはなるまい。たんなる一読者の立場にとどまらない会員の積極的な参加を『民間伝承』誌上で実現していくための呼びかけと応答の回路として、民俗語彙収集の要請とその報告が機能しているのだ。読者からの投稿欄はあってもごく限られたスペースしかない一般の雑誌と比較して、『民間伝承』誌上では「会員通信」欄が大きなウェイトを占めているのは、その一証左となろう。

すでに述べたようにこの時期、柳田は数多くの民俗語彙集を刊行した。「採集要項欄」にとどまらず、そうした語彙集の誌上への紹介が読者への参加を促していく。『民間伝承』誌上を見ると、第二号（昭和一〇年、以下元号省略）末尾には「産育習俗語彙採集要項」があるが、これは柳田が恩賜財団愛育会から刊行したばかりの『産育習俗語彙』の目次に簡単な注釈を施したもの。木曜会同人・橋浦泰雄はその紹介にあたって、最初に「今後新たなる資料の追加される事によつて、此の分類は更らに増補改訂されるであらう」と書き記す。民俗語彙の調査は語彙集の刊行によって終わりとなるのではなく、さらにその充実のためには会員の報告が重要な役割を果たすと、橋浦は会員に向けて鼓舞しているのだ。実際、その後第四号（一〇年）誌上の「会員通信」欄を見ると、「「産育習俗語彙」の中、壱岐関係のもの二三間違ひがありますから御報知します」という壱岐・山口麻太郎の投稿、「「産育習俗語彙」を読んで郷里明治村の資料を報告します」という愛媛県・山口常助の投稿、さらに鳥取県・蓮佛重寿の投稿と、読者の応答が相次いだことが読み取れる。さらに第五号（一一年）での岡山の今村、鳥取の田中両名による報告、第六号の宇和島・兵頭賢一の報告といったように、各地の読者が柳田の民俗語彙集をさらに補完すべく誌上に集ったのである。自らの身辺にある事象の報告が柳田による民俗語彙集の中に有機的に組み込まれ役立てられるという喜びを、こうした会員たちは味わったに違いない。

「採集要項」欄は、柳田が言う「小さい問題の登録」を具体的に読者に示すものとして位置付けられよう。既刊の民俗語彙集からの項目紹介ではなく、オリジナルな項目が示されたのは、第五号（一一年）の「婚姻習俗採集項目」が初となる。「一、婚礼及び花嫁を何と呼んでゐるか」で始まる項目は、次の第六号（一一年）に引き続き掲載されて全五〇項目から構成された。この執筆者は木曜会同人の大間知篤三。大間知が冒頭で「名称の方言はなるべく多く採集して下さい」と注意しているように、その事象に関する言葉すなわち民俗語彙に着目して調査することが

読者に対して改めて呼びかけられた。

以後、採集の要項として読者に提示されたテーマはこのようなものとなった。昭和一一（一九三六）年でいえば第一〇号に橋浦泰雄名義の「葬制資料採集要項」があり、これは「一、総名」から「三六、所属未定」までの項目からなる。第一一号は柳田名義の「祭礼名彙と其分類」で、翌第一二号とに二回に分けて掲載されたものだ。第二巻第一号、第二号では倉田一郎名義の「漁村語彙採集要項」、第二巻第三号と第四号は関敬吾名義の「昔話採集標目」が巻末に付された。

昭和一二（一九三七）年に入ると、柳田国男名義で「年中行事採集百項」（2‐5）が四回にわたって掲載された。他の要項は項目数が多くても三〇程度であったのに対し、こちらは「一、節折目」「二、大正月小正月」と新年の行事から順に一年の行事について取り上げたため項目数が百を数えて、紙幅がいつもより必要となったのである。その後、山口貞夫名義の「食物語彙採集要項」（2‐9、10）、小西ゆき子名義の「山村語彙採集要項」（2‐11、12）、山口貞夫名義の「住居語彙採集要項」（3‐2、3）と続く。この一二年はいわゆる郷土生活研究所名義での「山村調査」が予定を終え、引き続いて「海村調査」の取り組みが始まった年である。そのため番外編的ではあるが、第三巻第一号の末尾には「海村生活調査項目」全百項が示された。項目の後に「一刻も早く会員共通の便益に供したくと思ひ発表した」とあるように、調査に従事する限られたメンバーを超えて民間伝承の会会員と広く問題意識を共有することが目指されている。こうした記述からも、調査という実践を通して読者の積極的な参加を促そうという編集サイドの姿勢が読み取れよう。

昭和一三（一九三八）年に入ると、柳田名義の「服装語彙分類案」（3‐6、7）、鈴木棠三名義の「禁忌習俗採集要項」（3‐8）、再び柳田名義となり「妖怪名彙」が続く。この名彙は連載回数が最も多く、昭和一四年の第四巻第六号まで六回にも及ぶものとなった。「畏怖と信仰との関係を明かにして見たい」と冒頭で柳田が述べているように、この「妖怪名彙」は柳田の民俗分類でいえば、第三部心意現象を解き明かすための手がかりとして位置付けられるものだ。その意味で「禁忌習俗採集要項」がその前に掲載されていたのも、一連の流れとして押さえうる。さまざまな採集要項が読者に提示され、ここにきて柳田が最も重視していた心意現象にかかわる要項を示すことができ、柳田も一段落したと感じたのか、採集要項の掲載は以後、『民間伝承』誌上には見受けられなくなる。[2]

たんに雑誌を購読するにとどまらず、調査を通して積極的な参加を読者に要請するための仕掛けは採集要項の提示にとどまらない。読者の参加をより一層、促そうという試みが「会員通信」欄での「共同課題」の提示だ。第九号（一〇年）で木曜会同人の橋浦泰雄は「共同採集の問題」と題し、「此の狭い紙面を最も効果的に活用する一方法として、毎月会員の共同採集すべき課題を一課題宛選定して、これを略本欄の中心とするやうにしたらどうであらうかと思ふ」とその意図を述べる。そして「回答には出来るだけ皆が参加して組織的採集の実効を挙げたいと思ふ」と、会員の協力を呼び掛けた。これは雑誌を通じて遠隔地の研究者相互で情報交換が可能となるよう、橋浦が志向していたのだと鶴見太郎はいう〔鶴見　二〇〇〇ａ　一六三〕。橋浦はプロレタリア文化運動の要職を歴任し、「原始共産制の遺制」発掘を求めて、探究テーマを共同分配と労力交換に求めた人物である。その共同分配という行為は、橋浦にとって研究対象であるのと同時に、得られた資料の扱い方ともかか

わっていた。自らの主題を運動の組織面に織り込んでいくのが橋浦だった〔鶴見　一九九八　五三〕。昭和一三（一九三八）年に『民間伝承』の編集事務を引き受けることになる橋浦の姿勢も、同誌の方向性を決定するのに大きく影響したことがわかる。

同じ課題のもとに各地の事例を互いに持ち寄るという形式は、民間伝承の会発足の契機となった日本民俗学会講習会での座談会の進行方式とも相通じる。昭和一〇（一九三五）年七月三一日から八月六日までの座談会速記録に目を通すと、まず全国から参加した受講者の自己紹介の後、「各地の変わった食べ物」「各地の子守唄」「祭礼」「婦人と労働」がテーマとして取り上げられ、それぞれの地方の事例が次々と座談の席上で披露された。各地の関係者が一堂に集う座談会の形式と、「共通課題」を呼び掛ける雑誌の誌面構成とが運動の手法としてクロスオーバーし民間伝承への関心を喚起していることになろう。

柳田はこの座談会席上で柏餅に言及した際、全国的にみれば「随分いろ〳〵な名前があります。それに（ママ）比較したら面白いだらうと思ひます」と事象の名称に着目するように参加者に促す〔柳田　一九三五　四六三〕。さらに翌日の祭礼がテーマとなった座談の折、口火を切った柳田は「名称に重きを置かれると、少なくとも客観的に祭の興味の中心点が解って来るだらうと思ひます」と、再度その重要性について触れた〔柳田　一九三五　四九七〕。民俗語彙を指標として多様な事象を分類、整理する手法を通じ、全国各地から広く情報を集め、さらに会員相互で共有することを柳田は目指したのだった。

実際、「共同課題」への会員からの回答の方式を見ると、次第に民俗語彙を単位としたものの比率が高まっていく。第一回目の課題は「米以外の主食物の名称と、その食法」。課題提示の翌号、第一〇号（一一年）では「共同採集報告／米以外の主食物」と題して、橋浦も含めて一〇名の会員報告が早速、掲載された。最初に掲げられた井上正一の報告は、「アサイモチ」「ボーガモチ」「ロクトウ」「ハツタイ」とそれぞれの語彙をゴシックで見出しとし、ついでその解説文が続くといった形式をとっている。そうした形式は、他の報告者にも共通するものだ。この報告が掲載された「会員通信」欄の同じページには、「次回採集課題／若者組の加入並に脱退の時期とその作法」が予告されている。それを受けて翌一一号には八名の報告があるが、どちらかというと説明的な報告を求める課題の性質ゆえか、この号には民俗語彙による見出しは付されてはいない。報告形式にはいまだ揺れがあったことがわかる。とはいえ『民間伝承』誌上の「会員通信」欄を見ると、それ以前の八号頃までは見出しすらない短文の報告が多く目に付くので、柳田の呼びかけが次第に実行に移されていたことが読み取れる。「共同課題」への報告は、語彙を指標とした報告形式を他の会員にも次第に周知させる効果を、結果的に担ったことになる。

その次の共同課題は第一二号（一一年）に「祭礼の名称とその由来」として掲げられた。おりしも前号と本号、二号にわたって柳田の「祭礼名彙と其分類」が巻末にあり、この共同課題も「柳田先生の祭礼名彙を御参照の上で」投稿するよう、呼び掛けられている。「採集要項」欄と有機的に結び付けられて、ここでは課題が提示されたことになる。以後、「民謡の変つた名称」「三月十五日の行事と名称」など、合計十回にわたって課題が会員に示されていく。以上の課題はそれまで留意されることのなかった民俗学上の新分野に関する目安を示す〔戸塚　一九八八　八二六〕という評価は学問内容に対するものである。だが同時に民俗語彙を指標として会員の関心を喚起し、誌面への参加をいざなう効果を

「共通課題」欄が及ぼしたという運動論的な側面からの評価も見落としてはなるまい。

こうして集められた報告をどのように活用していくのか、という点で重要なのが各巻末尾に付された総目次と索引だ。年に一度まとめられる総目次の存在自体は、当時の雑誌に一般的なものだった。だが『民間伝承』の特徴はさらに索引が付け加えられたことである。第一巻の索引を見ると、最初に「分類及び排列の順序は」「おほむね柳田先生『郷土生活の研究法』に」依った、と記す。そして「第一部（有形文化）」「第二部（言語芸術）」「第三部（心意現象）」の順に、五十音順で索引が構成されている。その項目は「乾の柱」「入口」といった一般名詞だけではなく、「カイド」「ゲヤ」といった民俗語彙も多く含む。読者はこの索引に目を通すことによって柳田の分類法を知るだけではなく、個々の語彙が柳田の分類上、どこに位置付けられるのかを会得することが可能となる。さらに同じ語が複数回、誌上に登場していれば、そのページにあたって自らその語彙の比較をすることもたやすくなる。そしてそれこそが柳田が個々の会員に対して望んでいたことではなかったか。読者に対して民俗語彙の報告を通じて参加を要請する呼びかけと応答の回路にとって、投稿された数多くの報告を改めて編集しなおす役割を果たす索引は、必要不可欠な仕掛けだったといわなければなるまい。

注意しておきたいのは、この回路は柳田国男自身から会員に対しての一方向的なものでは、必ずしもなかったことである。たとえば『民間伝承』誌上に掲載された採集要項は、その後の会員による報告によって項目内容がより一層、煮詰められることになった。第一〇号（一一年）の橋浦泰雄名義「葬制資料採集要項」は、「此の要項は柳田先生の指示に基づいて、分類編列したもの」だという。しかし将来的に資料が集まれば新たな項目の追加や、より細やかな分類になることもありうるとして、会員に協力を要請している。このテーマによる民俗語彙集『葬送習俗語彙』の刊行は、先の要項が示されてからほぼ一年後の昭和一二年九月。目次を見ると、「葬制資料採集要項」での三六項目から一つ少ない三五項目から構成されている。その多くが前者と重複しているものの、たとえば「山じまひ」といった特定の地域の民俗語彙による項目を「火葬」といった一般的な語に置き換えているように、より項目としての洗練度が増している。[3] さらに「死霊を家から払ふ作法」を扱う「忌中ばらひ」が『葬送習俗語彙』からは削除されているといったように、細かではあるが後の柳田の学問展開を考えると重要な手直しがされていることは見落とせない。[4]

「採集要項」や「共同課題」によって読者に投稿を呼びかけ、それと対応して限られた誌面ながら会員からの報告に全体の四分の一の紙幅を割いた『民間伝承』。その呼びかけと応答の回路は、具体的には各地にいる会員それぞれが様々な民俗語彙を報告することによって作動していたのだった。柳田国男にとって民俗語彙とは、たんにその学問的方法論において重要だっただけではない。その運動論的要請からも、きわめて大きな役割を担う存在だったのである。その結果、数多くの会員がたんなる一読者にとどまらない積極的参加をすることが可能となったからである。

二　参加のシステムの求心力

『民間伝承』誌面から読み取れるのは、民俗語彙の報告を通じた会員への呼びかけと応答の回路の存在だった。だがそうした回路だけで参加

のシステムが十全に作動したと見るのは早計であろう。そのシステムを作動させていた求心力の所在について、ここで触れることにしたい。

民間伝承の会会員の数はどのように推移していったのだろうか。『民間伝承』の編集役も務めた木曜会の中心的メンバーの一人、橋浦泰雄の回想によると、第一号は当初三百部印刷したものの、三カ月目には早くも品切れになったのでさらに三百部、再版したという。『民間伝承』創刊時の会員は一六五名だったものの、会設立二年目の八月末までには七百名前後にまで大きくその数を増していた〔橋浦　一九七三　一二四〕。『民間伝承』の新入会員紹介や会員名簿からその入会状況を明かにした鶴見太郎の集計を見ても、会設立の昭和一〇（一九三五）年は個人の入会者総計三六九名、翌一一年は三六五名となっており、橋浦の回想を裏付ける。その後の動向は一二年に一六二名、一三年一一四名、一四年一二四名であり、この五年間の個人入会者総数は一一〇〇名を超えるまでに増大していった〔鶴見　一九九八　五七〕。次第に戦況が進む中、運動としての民間伝承の学が大きなうねりとなっていたことが伝わってくる数字だ。

ではそうした会員増に作用した求心力はどのようなものだったのか。一言でいえば参加のたやすさという条件が挙げられる。『民間伝承』の創刊号に掲載された「本会小規」を見てみよう。全体がわずか六項目から成るこの小規のうち、「目的」項目は「組織的採集及び研究の為に会員相互の連絡を図ること」という一文だけのシンプルなものである。「会員」項目では「本会々員の推薦による者」とあるが、これは排他的に会員を選別する意図からではなくて、会員の個人的ネットワークを活用して会員数を増すことをねらったものと読み取るべきであろう。入会自体が「会員相互の連絡」の契機となることが、ここで目指されていたのではなかったか。民間伝承に関心があればだれでも参加できる、そういった開かれた会としての方向性が、この小規からは浮かび上がってくる。

そうした広く開かれた会の性格を支える物理的条件の一つが、安価な会費の金額設定にあったことを取り上げたい。先の小規を見ると「会費」項目はイとロに区分されており、前者は「普通会員」で「月額金拾銭　但し半年分以上前納のこと」、後者は「維持会員　月額金五拾銭」という規定である。会員は二種に分かれているものの、大半の会員は普通会員を選択したことだろう。

この月額一〇銭という会費の金額は、当時の他の団体の会費あるいは雑誌の価格と比較した場合、どの程度のものだったのか。柳田も多くの原稿を寄せた民間伝承関連の啓蒙的な雑誌『旅と伝説』の場合、『民間伝承』創刊時の昭和一〇（一九三五）年九月号奥付では「一部金五十銭　送料金一銭五厘」とある。それに加えて前納で割引が適用される半年分、一年分単位の注文もあり、前者は送料込みで二円九〇銭、後者は送料込みで五円八〇銭である。『旅と伝説』の判型はＡ５判で、毎号百ページ程度の厚さということもありこの価格となったのであろう。民間伝承関連の地方団体の一例として、近畿民俗刊行会名義で発行された『近畿民俗』ではどうか。澤田四郎作、小谷方明他、民間伝承の会の有力会員からなる同刊行会からの創刊は昭和一一（一九三六）年二月。第一号末尾の「会規」を見ると、維持会員、普通会員の二種のうち、後者は「月額三十銭半年分以上払込たる者」とある。以上のように民間伝承関連の雑誌の場合、講読するにはおおよそ毎月三〇銭から五〇銭という金額を必要としていたことがわかる。その意味で民間伝承の会会費は、破格といってよいものだった。

こうした安価な会費が可能となったのは、『民間伝承』の体裁自体が当初B5判で八ページという簡易なものだったことにも起因する。先にあげた『旅と伝説』や『近畿民俗』はいずれもA5判でページ数は前者で百程度、後者で五〇程度と雑誌の体裁としては整ったものであり、その分価格に差が出るのはおのずと明らかであろう。柳田自身が編集に携わったそれまでの雑誌は『民族』にしろ『郷土研究』にしろ、ある程度ページ数もあり通常の雑誌としての体裁をとるものだった。その意味で目次さえもない僅かなページ数の『民間伝承』のスタイルは、「本会小規」にあるようにまさに「会員相互の連絡を図る」ためのフットワークの軽さを担保するものとなる。それは柳田が意識的に取った編集方針であり、毎月の会費をあえて一〇銭としたこともその戦略性という観点から理解できよう。『民間伝承』の創刊に先立つ昭和六（一九三一）年、柳田は東条操や橋本進吉らと雑誌『方言』を立ち上げる。そこで柳田が主張したのは、読者の大半が小学校の先生なので負担の多い四〇銭ではなく三〇銭を価格とすべきだ、ということだった。とはいえページ数が八〇ほどなので、結局は四〇銭に落ち着いたという経緯がある〔高藤一九八三　九七〕。このように会員の金銭的負担の度合いを織り込んで雑誌の価格を設定していた柳田にとって、民間伝承の会の会費をあえて一〇銭としたのは、戦略的な選択だった可能性は高い。そして会員数という点では、結果的に規模的な拡大が実現されたのである。(5)

民間伝承の会の開かれた性格を支えていた参加のたやすさという条件は、金銭的な面だけではなく、会員による投稿という側面にも及ぶ。民俗語彙の報告を通した呼びかけと応答の回路は、具体的には気軽な投稿を可能とする条件によって保障されていたのである。『民間伝承』誌上には採集要項や共同課題が提示されるのとあわせて、全体の誌面の四分の一に及ぶ「会員通信」欄が設けられていた。それに応じて毎号のように「寄稿歓迎」という見出しで、投稿への呼びかけがなされる。その字数はどの程度なのか、第一号の冒頭ページを見ると「会員通信　二百字以内」とある。これは二百字詰め原稿用紙一枚分に相当し、字数が多ければ及び腰となる会員にも気兼ねなく投稿を意識させる数字ということになろう。

その意味でこの二百字という字数は絶対的なものではなく、号を追ってみるとその記載には揺れがあることが読み取れる。たとえば「会員通信」が「問題と資料」欄に名称変更となっている第四巻第二号（一三年）では、たんに「十七字詰」とあるだけで「なるべく簡潔に且つ文字を鮮明に」と注意書きされている。これは一ページあたり四段に組まれた誌面で各段の一行あたりの字数一七字を指示するもので、それを守りさえすれば原稿量そのものについてはかなりフレキシブルに対応するという意味合いであろう。第五巻第三号（一四年）となると「資料」欄も含めて「簡潔を旨としなるべく一千字以内を好都合とします」と変わる。会員が採集要項や共同課題による調査に慣れてくるにしたがい、二百字には収まりきらないデータを報告するようになってきた状況がここには反映されている。

一千字以内という字数を提示したこの第五巻第三号の「資料」欄を見ると、いずれも何らかのテーマをもって題名とし、場合によってはテーマに即して民俗語彙単位で小見出しとする報告形式で共通する。たとえば大阪の高谷重夫の「岐阜県坂内村の婚姻」ではまず概要が述べられた後、「カホアハセ」「ヒザナホシ」「カネツケビロウ」「ヨメイハヒ」という民俗語彙を小見出しとして、その報告が続く。また瀬川清子の「広島県吉名村聞書」では「ガゼヒキ」「サカヅキオヤ」「ホウカムリヲトル」

「ドクオミキ」「ノシイレ」といった順で、漁村や若者組、結納など多様な事象の報告となっている。そこから読み取れるのは、個々の民俗語彙が報告のための最小のユニットをなし、その数またユニット相互の関係を調節することによって、報告者は全体の長さを自在に調節できる、ということだ。先の高谷の報告でいえば、婚姻関連の他の民俗語彙を見出しに加えればさらに報告は長いものとなろう。瀬川の報告にしろ、たとえば若者組に絞ってその関連語彙を加えていけば、また別の報告にすることが可能となる。会員が『民間伝承』誌上に報告を寄稿するための最小の、あるいは手軽なユニットとして民俗語彙は機能していた。

読者への呼びかけと応答の回路が誌面の方向を規定していた『民間伝承』に対し、すでにアカデミックなポジションを獲得していた学問分野では、一般読者の参加状況はどのようなものだったのか。木曜会同人の学歴や専門分野は多岐にわたるが、その中でも東京帝国大学でアカデミックな訓練を経た佐々木彦一郎と山口貞夫二人が専攻した地理学の状況をここで取り上げたい。

『日本地理学会五十年史』によれば同学会の機関誌『地理学評論』の創刊は大正一四（一九二五）年。その七年後には学会誌の発行部数は一千から一二〇〇部にも達しており、数からいえば設立から五年間の民間伝承の会入会者総数とほぼ同じ規模である。しかし、購読者のうち日本地理学会の会員はわずかに七〇名に過ぎなかった。会員が当初、東京帝国大学の地理学の卒業生中心だったからである。こうした組織の閉鎖性の一方で、『地理学評論』の発行部数を支えていたのは一般購読者の存在だったことになる。当時、地理学を懸命に学んだのは中等学校教員資格を取ろうとする文検受検者であったと、執筆者の石田龍次郎はいう。その地理の出題に関する委員には日本地理学会の主要メンバーが長くかかわっており、そうした事情も『地理学評論』の購読者数増加につながる条件となっていた〔石田　一九七五　一〇、一九〕。

文検の正式名称は「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」。明治一八（一八八五）年から昭和一八（一九四三）年まで施行され、受験者総数は推定で約二六万人以上を数えた。実施期間の長さ、受験者数の多さにおいて旧教育制度化では最大の資格試験であり、教育界に広く影響力を持った制度である〔寺崎　一九九七　三〕。『民間伝承』創刊時の昭和一〇（一九三五）年を例にとれば、六七二六名が受験し、六二二名が合格している。この難関を経て中等教員への道が開けていくことになるわけで、文検という社会的階層移動を可能とさせる制度が、地理学の学会誌へと読者をリクルートするのに大きく作用していたことになる。先の『日本地理学会五十年史』には「地理学評論の編集は、一般購読者をほとんど考慮に入れることなく、ひたすら純学術雑誌を目指して進められた」〔矢澤　一九七五　七一〕という一節がある。学会と一般購読者との関係が、一方で文検の出題者と受験者との関係にそのままスライドするものであったことを勘案すると、雑誌の編集サイドと読者との関係が対等なものとはなりようがない状況にあったことを端的に物語っていよう。

昭和期にあって『地理学評論』と比べ、文検受験を志望する購読者をより幅広く得ていたのは『地理教育』と『地理学』だったということが、合格者への聞き取りから明らかになっている〔佐藤　一九八八　九九〕。後者は古今書院から昭和八（一九三三）年に刊行されたもので、日本地理学会の会員が執筆陣の一角をなしていた。同時代の評に「オリヂナルな硬い論文もあればゴシップ記事もあつて硬軟交々至るの感が濃厚」「新時代に於ける雑誌一般の斬新な編輯法を採用し、所謂ジャーナリズ

ムの特色を多分に移した」〔青野　一九三八　一〇八〕とあるような、啓蒙的な商業誌として位置付けられるのが同誌だ。誌面には折に触れて「文検地理科本試験問題」「文検地理受験界の展望と希望」「文検地理受験夜話」といった記事が掲載されているように、その読者層として文検受検者が織り込まれて全体のページ構成がなされている。

『地理学評論』と比べてより一般的な読者層を念頭に置いた『地理学』ではあるが、雑誌の編集サイドがとる読者への姿勢は、誌の性格が啓蒙的であるが故に両者の関係が双方向的とはなりえないという前提に立つものだ。たとえば「初めて論文を書く人のために」という一文は、論文執筆に慣れず「何んだか、恐怖心に襲われて、筆が伸びない」という読者を対象とした記事である。そこでは論文に「少しでもよいから学会に貢献する点があればよい」と、読者を励ます。しかしその具体的な処方箋を見ると「地理学の論文を書くためには少なくとも数十日、或は数年間、研究に調査に従事しなければならぬ」と説く。研究の手法として具体的にここで提示されているのが、統計的・数学的方法、分布図による方法、聞き取りによる方法の三つで、初心者はこの三つ全部をやる必要があると筆者は結論付けている〔野辺　一九三六〕。論文を書くための案内と銘打ちながら、一般読者に与える印象は何よりも論文執筆のハードルの高さといっても過言ではあるまい。

読者への投稿呼びかけがなく、さらに一定の読者欄を継続的に設けることのない『地理学』からは、『民間伝承』のような読者への呼びかけと応答の回路を見出すことはできない。[6] ここにはアカデミズムによる序列に基づいた執筆者／読者という境界線が明確に引かれており、それは越えがたいものとして一般読者に提示されていたのだった。純粋にアカデミックな編集方針であれ、より啓蒙的な編集方針であれ、この点では態度は軌を一にする。読者が応答することは、ここでは期待されない。

その意味で民間学としての運動を推進する『民間伝承』から、アカデミズムによる序列意識が見受けられないのは大きな特徴だ。たとえば鶴見太郎が紹介する橋浦泰雄宛の一会員からの手紙にも、それはうかがえる。「私は少年時より伝説等に興味を持ち、研究も致そうと思ひながら病気の為果たせず昨今に至り、幾分かの研究も出来るやうになりましたので、此の機会に民俗学を学ぼうと首をつゝ込みました者です。学歴は病気の為中卒に止めました」という文面からは、鶴見が言うように民間伝承の会の活動が、一個人の内面にある知的探究心に火をつけたことが読み取れる〔鶴見　二〇〇〇b　二九二〕。そしてその探究心は、アカデミズムによる序列関係とは無縁のものである。

しかし民間伝承の会はアカデミズムと縁を全く持とうとせず、あくまでも在野の姿勢を貫き通したわけではない。そのゆるやかな連携を示す一例が、国学院大学での方言研究とのつながりだ。ここでは第33回日本口承文芸学会大会（二〇〇九年）での高木史人による報告「方言研究と昔話研究」から、一端を紹介したい。

方言学者・東條操が『方言採集手帖』を刊行したのは昭和三（一九二八）年。その作成には柳田国男も協力し、年中行事や人生儀礼の語彙採集が手帖には盛り込まれる。刊行後、ほどなくして同年には東條や柳田に加え、上田万年、橋本進吉らによって方言研究会が設立され、昭和六（一九三一）年には雑誌『方言』が創刊された。当時の柳田にとって、民間伝承の学と方言研究とは重複する要素が多かった、と高木は指摘している。そうした問題関心のもとに柳田らの働きかけを受けて同年に創立されたのが、國學院大学方言研究会であった。会を指導したのは國學院の教員で折口信夫門下の今泉忠義で、折口ばかりか柳田とも直接の親

交があった人物だ。この研究会会員のうち何人かが、その後設立された民間伝承の会にも参加していったと高木はいう。アカデミックな方言研究の流れの一部が、民間伝承の会にも流れ込んだことになる。

読者への呼びかけと応答の回路は、具体的にはどの程度の会員数を『民間伝承』誌面へと参加させていったのだろうか。本稿で取り上げる昭和一〇（一九三五）年から一四年までの五年間、「会員通信」欄およびその後継の「問題と資料」欄から、木曜会同人を除外して投稿者総数を数え上げてみた。その結果、投稿者総数は二六九名、投稿件数は一〇五三件を数えた。鶴見太郎が集計したこの五年間の個人入会者総数は一一三四名なので、その二三・七％の会員が平均三・九回の投稿をしたことになる。その中でも投稿回数が最も多かったのは、福島県の蒲生明の二四回。次いで東京都・鈴木棠三が二三回、島根県・牛尾三千夫が二二回、土佐・橋詰延寿が二一回、秋田・小玉暁村が二〇回といったように、上位五名はいずれもが二〇回以上、投稿したことになる。このうち鈴木棠三と牛尾三千夫両名は、高木史人氏の御教示によれば先述した國學院大学方言研究会会員である。(7)

『民間伝承』に埋め込まれた読者への呼びかけと応答の回路は、参加のたやすさを保障する条件を必要とする。それは具体的には安価な会費であり、限られた字数であっても可能な投稿規程という条件であった。わずかな字数でも報告ができたのは、『民間伝承』が求めていた民俗語彙の報告という形式によるところが大きい。民俗語彙を報告のユニットとすることによって、報告者は自在にそして手軽に誌上に参加しえた。アカデミズムの世界の場合、地理学を例にとると、文検という国家的な検定試験のシステムが一般読者を地理学へと志向させる求心力の一つとなっていた。しかしそうしたシステムが存在せず、あくまでも民間学というポジションに立つ民間伝承の学は、それを実際に作動させる運動論を不可欠とした。『民間伝承』誌面から読み取れるのは、そうした運動論の軌跡だといっていい。

三　参加のシステムがもたらす遠心力

読者に対する呼びかけと応答の回路が、『民間伝承』誌上への参加を促していったことは確かである。だがそこに作動するシステムは、参加に対する求心力を及ぼしていっただけではない。逆に遠心力として作用していたことも、他方で見落としてはなるまい。ここでは『民間伝承』を作動させていた運動論がはらんでいた、危うさの側面について述べることにしたい。

民間伝承の会に会員が数多く参集したのは、すでにふれたように参加のたやすさを保障する条件があったが故である。だがそのたやすさは、他方で数多くの一過的な参加者の輩出へと帰結しかねないものとなった。先に昭和一〇年から一四年の五年間に『民間伝承』の「会員通信」「問題と資料」欄に投稿した人数、件数を示した。そこからは何度となく投稿し資料を寄せる熱心な読者の存在が浮かび上がる。しかし逆にこのデータからは、一度か二度、投稿するだけで継続性のない読者の存在も浮かび上がってくる。五年間のうち、最終年の昭和一四年に初めて投稿する会員も存在するので、この年を除外した昭和一〇年から一三年の四年間での結果を示したい。それによればこの間の投稿者総数二二九名のうち、投稿回数一回のみの会員は八一名、二回が三九名、三回が二五名となった。その総計は一四五名にのぼり、投稿者総数の六三・三％、実に三分の二に近い数字となる。しかも一回だけ原稿を寄せた者は総数の

三五・四％であり、『民間伝承』投稿者の三人に一人は一回限りに終わったことになる。一度か二度、せいぜい三度投稿して終わりという会員が投稿者全体の三分の二を占めていたというのが、会員参加の一面の実態である。

民間伝承に関心を寄せても継続的に問題意識を持つ者が相対的に少なかったことは、『民間伝承』が創刊される前まで大きな役割をはたしていた雑誌『民俗学』へ資料報告を行っていた者の動向からもうかがえる。同誌の創刊は昭和四（一九二九）年七月、そして第五巻第一二号での終刊は昭和八年一二月。この四年ほどの期間に「資料・報告」欄に寄稿した者の総数は一五八名。そのうち、『民俗学』終刊後に引き続き『民間伝承』に資料を寄せた者はわずかに二一名にとどまる。しかも三回以上、報告を重ねた人数は山口麻太郎、楢木範行、本田安次、栗山一夫他、あわせて六名にしか過ぎない。民間伝承への関心が一過的でしかなかった者が当時、大勢を占めていた状況が伝わる。

同様の事態は、他の民間伝承関連の雑誌からもうかがえる。小国喜弘は『郷土研究』第一期（一九一三～一九一七年）の投稿者五七二名、『民族』（一九二五～一九二九）に投稿した者四三六名、『郷土研究』第二期（一九三一～三四年）への投稿者二三二名のうち、民間伝承の会に入会していることが確認できたのは、それぞれの総数のうち四・九％、一四・九％、二六・七％だったことを明らかにしている。先の三つの雑誌すべてに投稿し、かつ民間伝承の会に入会した者はわずかに沢田四郎作、胡桃沢勘内、中山太郎、林魁一の四名を数えるのみだった。小国は昭和一〇（一九三五）年を画期として民間伝承に関心を寄せる担い手が、地方名望家層から新中間層に変化し、それがこうした事態の背後にあると指摘する〔小国　二〇〇一　二九〕。

しかしその一方で民間伝承へ関心を寄せることのたやすさそれ自体がはらむ問題が、一過的な参加の背景にあることも見落としてはなるまい。長野県で戦前、郷土史家として活躍した栗岩英治はその間の事情について、昭和一一（一九三六）年にこう辛辣にあげつらう。栗岩は郷土研究に向かう者がまず直面するのは、古文書の草書体が読めない困難だという。そうした人々にとっての「お助け舟は、所謂民俗学的研究であるやうだ。考古学的研究でもあるやうだ。地理学方面の研究でもあるやうだ」と冷ややかな言葉を吐く。そして「そのうち殊に民俗学的研究の方面に向かふ者の多いのは、座ながら、且は何等の基礎知識なしに単に「蒐集」さへすれば、一かどの郷土学者となり得ないまでも、尠くとも郷土研究をやつてゐるといふ名義は獲得出来るからであるかもしれない」〔栗岩　一九五三　九〕と一刀両断する。一面的な批判ではあるが、事実の一端を突いていることも確かであろう。『民間伝承』誌上に埋め込まれた読者への呼びかけと応答の回路は、さしたる知識がなくとも誌面の採集要項をもとに身近な事例を報告すればそれでよし、という姿勢を招きかねないリスクを一面ではらんでいたことは否定できない。実際、すでに述べたように『民間伝承』投稿者の三分の一が一度だけの参加に過ぎなかったのである。

民間伝承関連の雑誌への投稿全般に見られるような一過的な参加という事態は、今一つ当時の郷土研究の大まかな見取り図の中で位置付けなければなるまい。先の栗岩英治の引用にもあったように、郷土研究という大まかなくくりの中には日本史、考古学、地理学といった分野が割拠していたのが実情だった。そうした見取り図からすれば、郷土に関心を持つ者にとって民間伝承への関心は選択肢の一つにすぎない、ということになる。実際にそれぞれの地方で郷土をめぐる知がどのように実践さ

れていたのか、という問いがここで要請されてこよう。

その一例として取り上げたいのが、重信幸彦が論じた昭和初期福岡県での小倉郷土会の動向だ。同会は同人誌『豊前』を刊行しており、それが『民間伝承』第一巻第四号（一〇年）の「紹介と批評」欄に取り上げられたことが、両者の接点の発端となる。その後、橋浦泰雄が会を訪れ、それを契機に小倉郷土会の会員一同が民間伝承の会に入った。柳田が小倉を訪れた際の講演が『豊前』に掲載される、また木曜会同人の杉浦健一も会に訪れるといったように両者の関係は密になっていく。しかし小倉郷土会という場と活動は、必ずしも柳田たちの実践に触発されて展開したわけではなかったと重信はいう。『豊前』では近世期の小倉を扱った記事群、聞き書きや実地調査の報告、会の行事から生み出された記事群が民間伝承関連の記事以外の大きな柱となっており、民間伝承への関心を中心に据えていたわけではなかった。重信はたがいに顔を突き合わせることができる地域を根拠地に、活字を読むことを習慣化するとともに自ら調べ考え、文字で表現する能力を身につけた人々の可能性を「実践のリテラシー」と名付ける。昭和初期の小倉郷土会は幅広く地域に展開し、豊かな横の「つながり」を育んだリテラシーの実践の結節点の一つであり、そうしたリテラシーの実践にとって民俗学はあくまでも選択肢の一つにすぎなかった〔重信　二〇〇九　一四六〕。

さらにこうした地方在住者に及ぶ遠心力だけではなく、アカデミズムの世界に対してもその力が及んだことを付け加えておきたい。一時的に柳田と距離を置き、民間伝承の会設立前に解消となった民俗学会で委員として中心的な役割を果たした一人、民族学者の岡正雄の不満はその一例だ。岡は『民間伝承』が創刊されてほどなく、木曜会同人の橋浦泰雄に書簡で「八頁にあまり多くの項目が入りすぎて居る。だから、どれもこれも御座なりで、尻切れトンボのやうなものしか、書かれて居ない」と批判する〔鶴見　二〇〇〇ａ　一五〇〕。全体的に断片的な記事が多く、アカデミックな観点からは認めがたいとする姿勢がここから伝わってこよう。

柳田とゆかりの深い京都帝国大学史学科との交渉にも触れておこう。菊地暁によれば両者の関係は意外に深くさかのぼるという。柳田が編集した雑誌『郷土研究』の最終号（大正六年）に収められた「寄稿者及通信者芳名」からは、史学科関係者六名を数え上げられるといったように看過しえない勢力だった。また昭和二（一九二七）年に京大に民俗学談話会（後に京都帝国大学民俗学会）が結成されるや、柳田も深くコミットしていく。その出席回数は遠来のゲストとしては最多の六回にも及んだのである。一方、昭和一一（一九三六）年から翌年にかけて大阪で開催された「日本民俗学廿五回連続講習会」では、講師総計四〇名のうち、八名が京大関係者といったように京大側も柳田に積極的な協力を果たす〔菊地　二〇〇九　一六四～一七一〕。とはいえ時代が下るにつれ、京大側の中心人物である国史学教授・西田直二郎は次第に数々の役職に忙殺されるようになり、京大民俗学会に時間を割く余裕を確実に失っていく。また学会で開く研究会のペースも昭和一〇年代に入ると頻度がまばらになる。そこに集っていた各分野の参加者も、それぞれ独自の動きが際立ってくる〔菊地　二〇〇八　五六六〕。こうした動向は民間伝承の会設立と無関係とはいえ、結果的には柳田の取り組みとの接点を希薄なものとしていった。

こうしたアカデミズムと民間学との棲み分けといった事態は、柳田周辺の木曜会メンバーに目を向けるとより明確となる。山村調査の実行部隊として活躍し、『民間伝承』誌上では巻頭論文を飾った木曜会同人の

主要メンバー一六名について出身や学歴、戦時中の動静、柳田との関連等を鶴見太郎が一覧表にしている〔鶴見　一九九八　三四〕。それによれば民間伝承の会が発足した昭和一〇（一九三五）年当時、多くのメンバーが三〇代の若手であった。大学卒の学歴であっても、専攻分野は経済学、ドイツ文学、地理学、史学、宗教学、国文学と多様で、何らかの傾向が見出せるわけではない。メンバーの戦時中の動静を見ると、アカデミックなポジションに着いていたのは満州建国大学教授の大間知篤三、東京帝国大学講師の佐々木彦一郎、明治大学講師の山口貞夫、民族学研究所嘱託の関敬吾と杉浦健一に限られる。しかも佐々木は昭和一一（一九三六）年に、山口は昭和一七（一九四二）年に早世。柳田周辺で民間伝承の会を担う者の多くが、民間学という立場から関わっていたことがわかる。その分、柳田がそれ以前に雑誌『民族』で接点を持っていたアカデミズム関連の人脈は、ここでは希薄だ。仮に関わるにせよ、講習会の講師という立場での一時的な機会に限られた場合が多い。

『民間伝承』に埋め込まれていた読者への呼びかけと応答の回路は、参加のたやすさという条件に担保されたものである。だがそれは一方で、一過的な参加者の多発という事態を招く危うさをはらんでいた。さらに当時の郷土研究をめぐる状況をみると、受容する側には歴史学、考古学、地理学といったように民間伝承の学以外にも、多様な選択肢が開かれていた。そうした事態は、一過的な参加を結果的に後押しするものとして作用する。他方、民間伝承の会はアカデミズムの世界と一定の距離を置いて、活動が展開されることになる。アカデミズムと民間学という棲み分けの図式が、ここにより明瞭に浮かび上がってくることになった。

最後に

柳田国男の方法論で重要な位置にある民俗語彙は、民間伝承の学を推し進めるための運動論という側面からも位置付けなければならない。昭和一〇（一九三五）年に創立された民間伝承の会の機関誌『民間伝承』には、読者により積極的に参加を促すための呼びかけと応答の回路が埋め込まれていた。それは具体的には読者に「採集要項」欄や「共通課題」を通じて、民俗語彙単位で調査、報告を要請することで作動していた。そうしたこともあり、民間伝承の会には数多くの会員が集うことになる。

そうしたシステムを作動させていた求心力は、参加のたやすさという条件である。民間伝承の会の規約はシンプルなものであり、さらに会費も月額一〇銭といったように安価に設定されていた。さらに『民間伝承』に投稿するにあたっても、ごく限られた字数でよしとされ、気軽な投稿を可能とさせていた。そうした『民間伝承』の姿勢は当時のアカデミズム関連の雑誌の方針とは、およそ異質なものである。しかしその一方で、こうしたたやすさが会への関与にとって遠心力として作用した一面があったことも、否定できない。結果として一過的な読者が発生しかねない危うさにつながったからである。また民間伝承の会が発足するのと軌を一にして、アカデミズムと民間学との棲み分けという事態が進んでいくことになる。

民間伝承の会を立ち上げる前まで柳田が取り組んでいたのは、長野県で地元ゆかりの『真澄遊覧記』等を活字化して知のデータベースを作り上げ、同時に民間伝承に関心のある読者を組織化することであった。しかしそれはともすれば地元の史料発掘に終始する「お国自慢」へと読者

を閉塞させかねないリスクをはらんでいた。柳田が目指していた全国の事例相互の比較をいかにして実現していくか。そのための運動論を具体化していったのが、民間伝承の会の取り組みだった。橋浦泰雄のようにプロレタリア運動に従事していた者が合流したことは、柳田の運動論を実現していく上で大きな力となっていく。『民間伝承』を刊行するようになってからも柳田と長野県との縁は続く。だが柳田のメディア戦略は性格、内容ともに飛躍的な変化を遂げていたのだった。

（1）ただしその後、民俗語彙を重視する方法は、資料の地域的歴史的条件を捨象してしまいかねない「語彙主義」として批判された。そうした批判の後の再評価の動きも含めて、鈴木寛之「民俗学と語彙研究」〔鈴木　一九九八〕を参照のこと。

（2）厳密にいえば関敬吾が「民間文芸モティーフ分類」（一四年・4‐7、8）、「ルムプの昔話」（一四年・4‐9、10、11）を掲載している。ただしこれは口承文芸に関する海外の文献から関なりにまとめたものであり、柳田が直接関与しているものではない。その意味で他の採集要項と同じ扱いはできないと考える。

（3）葬制資料の報告を全国各地から求める試みは、すでに昭和八（一九三三）年に『旅と伝説』（七月号）誌上で「誕生と葬礼号」としてなされている。巻頭に柳田の「生と死と食物」が据えられた本号の「各地の葬礼」では全六四編が掲載され、ページ数も二百近い大部のものとなった。とはいえ個々の報告の体裁には統一性は全く見られない。そうした事態に対して『民間伝承』誌上での民俗語彙を指標とした「葬制資料採集要項」の提示は、調査にあたって全国の会員に報告すべき内容、形式ともに大きな指針を与えたことは間違いない。

（4）祖先祭祀の起源を霊魂恐怖の感情に求めるのか、逆に愛慕の念に起因すると見るかという点が明治以降、論議されていた。柳田は当初、前者の立場に立っていたが後に立場を変え、その成果は『先祖の話』に結実する〔矢野　二〇〇六　二四九〕。この時期の柳田はすでに死者との親密な交流を祖先祭祀の本質とみなしていたが、『葬送習俗語彙』での変更はそのだめ押しとして位置付けられるものだ。

（5）しかしそれは他方で柳田個人の金銭的痛みを伴うものとならざるを得なかった。会が発足して二年目の会計報告が『民間伝承』誌上にある（一二年・3‐2）。それによれば収入合計一四八六円あまりのうち、四七〇円ほどが会費であったのに対し、柳田の寄付は二五〇円にも上っているのである。三年目でも状況は変わらない。第四巻第一号（一三年）掲載の会計報告では、収入合計一五五五円余りのうち、会費収入は五一六円にとどまる一方、柳田の寄付は三六〇円と前年度をさらに上回っている。それでもこの年度は収支の差引不足額が一五〇円にも達しており、一〇銭という会費の額がいかに会の運営に無理を強いていたかがわかる。

（6）読者への呼びかけと応答の回路を意識的に編集方針に織り込んだ事例としては、『民間伝承』以前にすでに『文章世界』に代表される投書雑誌が存在する。明治三九（一九〇六）年創刊の『文章世界』は、大正中期に至るまで投書雑誌として高い知名度を誇るものだった。しかし文壇への登竜門を謳うものの、投稿入選者が文壇に認められる可能性は非常に低いのが現実であった。「文壇に認められるという夢をちらつかせ、投書欲をかき立てて消費の拡大あるいは保身をはかる」〔島村　二〇〇四　四一〕のが、結局のところ『文章世界』の実態だった。その意味でその呼びかけと応答の回路は、実際には全く機能していなかったこ

とになろう。

（7）高木史人氏の御教示によれば、鈴木棠三、牛尾三千夫以外に『民間伝承』に投稿した國學院大学方言研究会会員には近藤喜博、臼田甚五郎がいる。またその会員ではなくとも國學院大学に学生として所属し、あるいはしたことのある投稿者としては、今井福次郎、岩崎敏夫、小林武治、山下久男、牧田茂、白井永二、角川源義、石塚尊俊が該当する。

青野寿郎　一九三八　「本邦地理雑誌興亡記（七）」『デルタ』第二巻第一〇号、古今書院

石田龍次郎　一九七五　「戦前回顧」日本地理学会編『日本地理学会五十年史』古今書院

伊藤幹治　一九八七　「柳田国男と『民間伝承』」後藤総一郎編『柳田国男研究資料集成　第14巻』日本図書センター

大月隆寛　一九九七　『顔あげて現場へ往け』青弓社

鹿野政直　一九八三　『近代日本の民間学』岩波書店

菊地暁　二〇〇八　「京大国史の「民俗学」時代―西田直二郎、その〈文化史学〉の魅力と無力―」丸山宏他編『近代京都研究』思文閣出版

菊地暁　二〇〇九　「敵の敵は味方か？―京大史学科と柳田民俗学」小池淳一編『〈歴博フォーラム〉民俗学的想像力』せりか書房

栗岩英治　一九五三　『町村の史的価値及びその研究法』信濃史料刊行会

小国喜弘　二〇〇一　『民俗学運動と学校教育　民俗の発見とその国民化』東京大学出版会

佐藤健二　二〇〇一　『歴史社会学の作法　戦後社会科学批判』岩波書店

佐藤由子　一九八八　『戦前の地理教育―文検地理を探る』古今書院

重信幸彦　二〇〇九　「「野」の学のかたち―昭和初期・小倉郷土会の実践から」小池淳一編『〈歴博フォーラム〉民俗学的想像力』せりか書房

島村健司　二〇〇四　「文壇と投書雑誌と投書家共同体の力学―『文章世界』の中の横光利一」『國文學論叢』第四九号、龍谷大學國文學會

鈴木寛之　一九九八　「民俗学と語彙研究」関一敏編『現代民俗学の視点第二巻　民俗のことば』朝倉書店

高藤武馬　一九八三　『ことばの聖　柳田國男先生のこと』筑摩書房

鶴見太郎　一九九八　『柳田国男とその弟子たち　―民俗学を学ぶマルクス主義者』人文書院

鶴見太郎　二〇〇〇ａ　『橋浦泰雄伝―柳田学の大いなる伴走者』晶文社

鶴見太郎　二〇〇〇ｂ　「柳田国男と「民間伝承の会」―「一将功成万骨枯」の問題」『東北学』VOL.2東北芸術工科大学東北文化研究センター

寺崎昌男　一九九七　「序章　なぜ「文検」に着目するか」寺崎昌男・「文検」研究会編『「文検」の研究―文部省教員検定試験と戦前教育』学文社

戸塚ひろみ　一九八八　「民間伝承の会」柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房

永池健二　一九八八　「常民史学の確立」柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房

野辺郁三　一九三六　「初めて論文を書く人のために」『地理学』第四巻

第五号、古今書院
橋浦泰雄　一九七三　「柳田国男との出会い」『季刊柳田國男研究』第二号、白鯨社
長谷川一　二〇〇三　『出版と知のメディア論　エディターシップの歴史と再生』みすず書房
矢澤大二　一九七五　「日本地理学会の研究活動」日本地理学会編『日本地理学会五十年史』古今書院
柳田国男編　一九三五　『日本民俗学研究』岩波書店
矢野敬一　二〇〇六　『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館
矢野敬一　二〇〇九　「柳田国男と読者のネットワーク編成―昭和初期・長野県での『真澄遊覧記』『一茶叢書』の刊行戦略」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第五九号